或 問　WAKUMON 175
No. 8 (2004) pp. 175～176

西学東漸研究の中文・日文文献情報

著書

1.　『中外物理交流史』、王氷著、湖南教育出版社、2001 年 9 月、A5 判、276 頁、17 元

本書は、戴念祖主編の「中国物理学大系」の一冊として執筆されたものである。物理学という分野における中外の交流を中心に氏のこれまでの研究をまとめられたものである。内容は、以下の通りである。

第 1 章　古代中国與外域有関物理学知識的交流（16 世紀末期以前）
第 2 章　明末清初時期西方物理学知識在中国的伝播（16 世紀末期——18 世紀中期）
第 3 章　晩清時期西方物理学知識在中国的伝播（19 世紀中期——20 世紀初期）
第 4 章　中国和日本之間物理学知識的交流（17 世紀初期——20 世紀初期）
第 5 章　西方人士対中国伝統物理学知識的介紹和研究（17 世紀初期——20 世紀初期）

本書は、「物理学名詞的翻訳和審定」（第 3 章 6 節）、「物理学名詞的交流及比較」（第 4 章 4 節）とあるように物理学の術語の成立について多くの頁を割いている。

本書は、2001 年 9 月に出版されたが、少部数（1000 部）のために日本ではなかなか手に入らなかった。

2.　『『明六雑誌』とその周辺——西洋文化の受容・思想と言語』、神奈川大学人文学研究所編、御茶の水書房、2004.3、A5 判、239 頁、3800 円＋税

本書は、学際的な研究者による論文集である。高野繁男氏によれば、思想・言語の研究者でスタートした『明六雑誌』の輪読会に、途中から歴史、法律、経済、中国近代史などの専門家、さらには外部からも研究者も加わり、30 以上読み合わせ会を行った。本書は、その研究成果である。

本書には次の 7 編の論文が収められている。以下、高野氏の序文によって、本書収録の論文を紹介する。

（1）伊坂青司　「森有礼の「妻妾論」をめぐって」　明六社の同人たちが、近代社会の建設を構想するに当たって、その足元をなす家族制度をどう改革しようとしたか、森の「妻妾論」を中心に据えて、当時の新しい家族論をめぐる問題点を追う。

（2）鈴木修一　「西周「人生三宝説」を読む」　「人生三宝説」は未完に終わったとはいえ、西洋哲学の集大成ともいうべきもので、新時代に即した倫理思想を打ち立てるべき必要性を過激なまでに追求していると評価したうえで、しかし、西の試みは「失敗した真理」ともいうべきものでもあった。ただ、これは啓蒙期の思想家の宿命だったとする。こ

の結論を追体験するかたちで問題点に迫る。

（3）吉井蒼生夫　「西欧近代法の受容と箕作麟祥」　日本近代法制史の視点から、西欧近代法の受容の基礎を築いた先駆者を代表し、また『明六雑誌』の中心的人物でもあった箕作麟祥をとりあげ、西欧近代法の受容との関連において、その活動の軌跡を考察する。

（4）孫安石　「一八六〇年代の上海における日本情報」　日本より一足先に開国し、1862（文久 2 年）に刊行された「上海新報」を扱う。ここには、日本に関する論説などが掲載されているが、とくに高杉晋作など、日本が開国に至る史料としての役割、換言すれば「明六社」が結成される前夜、またその周辺を理解する論文となっている。

（5）岡嶋千幸　「「社会」という訳語について」　「社会」ということばが成立する経緯をとおして、その背景となる近代社会の思想構築を「明六社」の同人たちの発言をとおして分析する。

（6）高野繁男　「『明六雑誌』の和製漢語」　日本人がかつて体験したことのなかった新思想の移入を支えることばの創造を「和製漢語」において、その道語法を解明する。

（7）浅山佳郎　「明六訓読文の助詞の文法」　外国語である「漢文」を「漢文訓読体」という日本文に仕立てたメカニズムを助詞の機能から明らかにする論文である。

3.　『日本洋学史――葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容』、宮永孝著、三修社、2004年6月、454頁、4800円＋税

本書は、以下の構成を持つ。

第一章南蛮語学のあけぼの――ポルトガル語、古典ラテン語

第二章蘭学――オランダ語

第三章英学――英語全盛時代の到来

第四章独逸学――英語につづくドイツ語

第五章法朗西学――ドイツ語につづくフランス語

第六章魯西亜学――フランス語につづくロシア語

7 つの外国語に関する日本での受容の歴史全般を扱う意欲作であることが分かる。奥付によれば、著者は、日本洋学史、異文化交流史研究家であり、これまでに日独の文化交流に関する著書を出版したことがある。しかし、著書の内容から日英、特に英華辞書に関しては、必ずしも詳しくないと見受けられる。

沈　国威輯